

「パウル・クレーの芸術」展（山口県立美術館） をもとにした鑑賞指導の試み

— 3つの学習指導計画 —

岡田匡史*・隅 敦**・小田村泰彦***・伊藤和子***

Three Teaching Programmes for Art Appreciation Based on the Exhibition,
“Paul Klee Retrospective” at the Yamaguchi Prefectural Museum of Art

Masashi OKADA, Atsushi SUMI, Yasuhiko ODAMURA, Kazuko ITO

(Received November 19, 1993)

キーワード: 鑑賞教育プロジェクト、「パウル・クレーの芸術」展（山口県立美術館）、講読資料の鑑賞授業フォーマット、美術館教育、鑑賞能力の発達段階、「ミュージアム・アドベンチャー」（岡本芳枝氏 [広島市現代美術館]）、美術講座とギャラリー・トーク（斎藤郁夫氏 [山口県立美術館]）、展覧会の鑑賞題材化、鑑賞の学習指導案、鑑賞の模擬授業

Ⅰ 「鑑賞教育プロジェクト」の継続的発展

「美術科教育特論演習Ⅱ」では、新しい受講生を迎え、前年度の鑑賞教育研究の成果を踏まえて、「鑑賞教育プロジェクト」の継続的発展を図ることにした。

演習では、鑑賞教育に関する英文資料を講読し、そこで学んだ諸観点を参照しながら、展覧会をもとにした鑑賞授業を具体的に構想するという、前年度と同じ課題に取り組んだ。今年度、鑑賞題材に取り上げた展覧会は、「パウル・クレーの芸術」展（1993年6月1日～7月25日、山口県立美術館）である。

そこで、本章では、演習の活動経緯の概要、ならびに、鑑賞教育について新たに学んだ事柄を、次の3点を中心に述べておきたいと思う。

- ①文献購読
- ②岡本芳枝氏（広島市現代美術館）が進める美術館教育
- ③斎藤郁夫氏（山口県立美術館）による「親と子の美術講座」

1. 文献購読

講読資料は、“art education”誌に毎号掲載されている、“Instructional Resources”の中から、ヴァス・プラブ（ロサンジェルス近代美術館・教育部部長）「同時代美術: 新しいコン

* 山口大学教育学部

** 山口大学大学院教育学研究科・山口県下松市立中村小学校

*** 山口大学大学院教育学研究科

テキストにおける見慣れたモノ¹⁾」を選んだ。家具調度類・雑貨・装飾具・印刷物等の、日常的なモノを利用した、現代美術の多様な表現を鑑賞・理解することが、資料が提示する鑑賞授業の目標である。鑑賞対象は、ルイーズ・ネヴェルスン、クレス・オルデンバーグ、ベティ・サー、ミッチェル・シロップの4作品である。

この資料には、鑑賞授業のフォーマットが明確に示されていて、鑑賞授業を構想するにあたって有益な観点が得られた。以下に、そのフォーマットを構成する4つのステップと各活動概要を示したので、参照願いたい。

Step1: 日常的なモノに関する学習（導入: 主題の理解）

各種の日常的なモノを準備し、その材質・機能等の諸性質や製造方法、さらにはその文化的価値に関する事柄等を多面的に考える。

Step2: 作品鑑賞（展開1: 第一印象→感じ味わう活動→考える活動）

鑑賞資料カードを活用しながら、作品を1点ずつ鑑賞し、作品の特質や作家のコンセプト・価値観等について諸観点から考える。

Step3: 4点の比較鑑賞と美術史的背景の理解（展開2: 活動内容の拡充+知識を学ぶ活動）

4点を比較鑑賞し、相違点・類次点について検討・討議する。また、4人の作家の美術史的背景を学ぶことで、鑑賞活動をより深める。

Step4: 諸種の発展的な関連活動（総括: 自己探求型の調査活動、表現への展開等）

美術史の書籍・美術雑誌・展覧会図録等で、4人の活動をもっと詳しく調べたり、コラージュを制作したりする、発展的な関連活動に取り組む。

今回、小田村と伊藤は、この授業設計を参照し、事後授業に鑑賞と関連する簡単な表現の時間を設けている。

2. 岡本芳枝氏（広島市現代美術館）が進める美術館教育

ところで、隅が演習で、中国新聞・文化欄に掲載された、岡本芳枝学芸員（広島市現代美術館・教育普及担当）の美術館教育に関する記事「「美術館教育」の現状—NYの研修に参加して²⁾」を紹介したことが、今年度の研究活動を実質的に進展させる重要な契機となった。

岡本氏は、ニューヨーク近代美術館での講義・研修を中心とする、美術館教育研修ツアーに参加し、美術館教育の現状を熱心に学んできている。今年度から、その岡本氏の立案・企画により、館所蔵作品をもとにした小学生対象の鑑賞教育プログラム「ミュージアム・アドベンチャー」が始まり、毎回（毎月第2土曜日）、ユニークな鑑賞活動が実践されている。

隅は、第2回「えのぐのイロイロ（5月8日。本活動の詳細は、II-1 2.(1)参照）」、第3回「ストライプ物語（6月12日。鑑賞作品: フランク・ステラ「ラッカ」）」に、家族で参加し、美術館教育を直接経験することで、鑑賞教育に関する多くの有意義な示唆を受けた。また、小田村も第2回のプログラムを経験している。岡田も、前年度受講生の静屋智（山口大学教育学部附属山口小学校）と、大野和規先生（同附属山口中学校）と一緒に、岡本氏から「ミュージアム・アドベンチャー」を中心に美術館教育・鑑賞教育に関する貴重なお話を伺うことができた。そのとき、岡本氏が、上記研修ツアーで講義を担当した、フィリップ・イェナワイン（ニューヨーク近代美術館・教育部部長）の著書『モダンアートの見かた³⁾』を紹介してくださり、演習での研究活動に役立った。

上記記事には、学校教育で鑑賞教育を進めるにあたって必要な、鑑賞能力の発達に関する

る研究が紹介・解説されており、大変勉強になった。以下は、鑑賞能力の5つの発達段階に関する、アメリカ・アナレス女史（ニューヨーク近代美術館の教育プログラム責任者）の理論を、岡本氏が要約したものである（岡田が箇条書に整理）。

- 第1: 物語の段階—作品をじっくり見ようとせず、自分の記憶や経験へ連想が飛躍してしまう。セザンヌの静物画に描かれたオレンジを見て「今朝食べたオレンジは酸っぱかったな」と別の想像を始めるなど、その思考は作品の中に入り込むことができない。
- 第2: 構築の段階—作品に接する機会が増えるにつれて、多くの人は美術に関する知識や情報を増やそうとする。また、作品を観察することを心がけるようになる。
- 第3: 分類の段階—鑑賞体験とともに知識が増えるにつれて、美術史上の分類などを重視するようになる。作品を見たときに知識のみを話したがることに特徴がある。
- 第4: 解釈の段階—美術史、技法などのあらゆる知識を踏まえた上で、自分の感性を加えて解釈ができるようになる。
- 第5: 再創造の段階—美術に関して熟知しており創造者であるアーティストという存在に敬意を払う。作品と対話するかのような深い思索ができる。

この発達理論によれば、小学校低・中学年の鑑賞活動は第1段階に属し、高学年から中学校にかけて、その活動は第2段階に移行すると考えられる。小学校学習指導要領改訂に伴い、高学年の鑑賞指導を独立して行うことが決まったが、その処置は理論的に妥当であったわけである。また、前述した講読資料の鑑賞題材は、第4段階辺りを最終目標にしていると考えられる。岡本氏によれば、知的理解が増して頭でっかちになってくる、第3段階の活動様態は、美術学生に典型的に見られるもので、岡田もそういう時期を過ごした覚えがある。

美術館教育の場合、学習指導要領や年間指導計画等には基本的に縛られず、また、評価・評定という活動も義務づけられていないので、確かに自由な観点・着想で鑑賞教育プログラムを考えることができる。演習で1度、隅がビデオ撮影してきた第3回のプログラム「ストライプ物語」の活動風景を見たが、その機智に富む楽しい活動が羨ましくさえ思えた。以下は、その活動概略である。

***事前の指示:**参加者はストライプ模様のハンカチ・靴下・服等を身につけてくる。

- ①導入部: インストラクターが着てきた服等を見て、ストライプ模様や色の表現について感想・意見を述べ合う。
- ②展開部1: 作品鑑賞。色札を使ったジャンケン・ゲームをして、色帯の複雑な交差や画面構成等について理解する。
- ③展開部2: 「分度器シリーズ」のスライド鑑賞。
- ④関連活動1: スタッフが準備した各種ユニット（分度器シリーズの構成要素）で作品を制作する。
- ⑤関連活動2(総括): 展示室で、同じステラの壁面装着型の作品「妖しき汐煙」を探す。

この活動フォーマットは、前述した講読資料の鑑賞題材のものと基本的に同じである。

上記鑑賞教育プログラムには遊び的要素が豊富に盛り込まれており、楽しむことに最大の力点が置かれているように見える。小学校教育では、第1～4学年を対象にした表現分野として、遊びを基本とする「造形遊び」が設けられているが、美術館教育では、その鑑賞版とも言える活動が先導的に実践されているわけであり、積極的に参照したいと思う。

加えて、美術館教育の場合、無論、美術鑑賞を第1義とした教育実践が展開できるわけ

だが、学校教育の場合、その本質的理念は人間教育であるため、子どもの表現を離れ、大人の美術を中心に置く鑑賞指導はできにくいという先入観が働きやすい。だが、美術鑑賞は、基本的に人間の表現を通して人間を学ぶ活動である。その点に関連し、岡本氏は記事の中で、むしろ人間教育的観点から上記先入観を砕く次の発言をしている。

「鑑賞とは、「(絵の中の)事実を客観的に判断しながら、その上に自分の感性や経験をあわせて、自分の考えをまとめていく」ことであり、鑑賞力を養うことは、思考形成のためのトレーニングに通じる。美術鑑賞は、知識や教養だけにとどまることなく、人間の本質にかかわる問題だといえるだろう。」

3. 斎藤郁夫氏(山口県立美術館)による「親と子の美術講座」

広島市現代美術館で、第3回「ミュージアム・アドベンチャー」が行われた日、山口県立美術館では、斎藤郁夫専門学芸員による「親と子の美術講座—パウル・クレーの人と作品」が開かれた。この講座には、岡田、小田村、伊藤と中学校3年生の長男・盛通君が参加した。

斎藤氏は、クレー展の企画メンバーの1人であり、図録⁹⁾の編集にもあたっている。その図録には、斎藤氏の「クレーと近代芸術—クレーの造形思考とフィードラーの芸術論をめぐって⁶⁾」と題する論文が掲載されている。

講座では、斎藤氏がスライド鑑賞を織り交ぜながら、クレーの作品を理解するために、2種の絵画表現という主題を掲げ、次の諸観点から筋道立った解りやすい講義を行った。

- a. 日常景観を描いた絵—幾何学形態を配置構成した抽象絵画
- b. 実際の顔(写実・具象絵画)—嘘じゃない顔(絵画の真実。ex. ピカソのキュビズム的表現)
- c. 写真のようなストップ・モーション的表現—様々な出来事の同時表現(非整合的な時間表現。ex. クレー「世界劇場(寄席)」)
- d. 対象の客観的描写—画家の内面の主観的表現(ex. クレー「無題(沈潜)」)
- e. 人物画・静物画・風景画等、動かない対象の表現—運動・変化・成長等の時間的要素の表現(未来派参照。ex. クレーの主要モチーフ: 矢印、植物文様の線、S字、渦巻、文字・数字・記号等)

講座に続いて、今度は展示会場に場所を移し、斎藤氏がギャラリー・トークを行った。その時間には、実物の作品を前にして、斎藤氏の専門的研究に基づいた興味を惹く話が沢山聞け、美術史的理解を深めることができた。中でもクレーが実験的に試みた素材・技法に関する話や、クレーが生と死のような2種の対立的概念をもとに表現を展開したという話は、題材開発の観点から大変参考になった。

また、この日、美術講座、ギャラリー・トークという、美術館教育のオーソドックスな活動形態を経験できたことは、演習で学校教育での鑑賞教育を考えていく上で有意義であった。

*

今年度の演習は、文献購読に加え、岡本氏が進める美術館教育を知ったことと、斎藤氏の美術講座、ギャラリー・トークを通じて、クレー展の鑑賞題材化に役立つ諸種のヒントを得たことで、その活動内容が随分深まったと思う。

Ⅱでは、これらの活動を経て学んだ事柄に基づき、隅、小田村、伊藤が、各自構想した鑑賞題材に関する基本的観点を述べ、Ⅲに3者の学習指導案をまとめて掲載する。また、

岡田が、補筆・手直し等を含む各論の指導、I・IVの執筆、本稿の構成・編集を行った。

以下に、各題材の概略を示したので、参照願いたい。

①隅:「パウル・クレーってなんだ? (小学校第2学年)」

岡本氏の美術館教育に関する論と、「ミュージアム・アドベンチャー」の参加経験を踏まえ、クレーの各時期の自画像を貼りつけた自作ベストを着てのパフォーマンスの展開や、「えのぐイロイロ」での「イエス&ノー クイズ」を範とする活動形態の導入により、ゲーム的要素が強い鑑賞授業を試みる。

小田村:「パウル・クレー →矢印の秘密← (小学校第6学年)」

岡本氏の活動実践を参照するとともに、題材の具体的開発にあたっては、クレーの主要モチーフの1つである、矢印に関する斎藤氏の解説を参照。事前授業では、その矢印をテーマとする鑑賞活動の展開を図り、次時の展覧会鑑賞では、各自が自らのテーマを探す活動を位置づける。事後授業では、講読資料にあったように、クレー展の鑑賞体験を踏まえ、自らのテーマに基づく絵を葉書に描くという表現課題を設ける。

伊藤:「クレー絵画展の鑑賞 (中学校第3学年)」

クレーの内面表現や造形観に関する、斎藤氏の解説を参照し、クレーの作品の鑑賞を通して、生と死の問題を考えるという活動展開を試みる。また、鑑賞の基礎になる、点・線・面・色彩等の視覚言語的要素の働きや、画面構成の特質等を、質疑応答形式で学ぶ活動を位置づける (なお、岡田は盛通君から展覧会の感想文をいただき、クレーの死を主題とする作品に対する、率直で鋭い意見を述べた箇所に感銘を受けた。それで、伊藤に盛通君の感想に学び、生と死の問題を見つめる鑑賞授業を構想することの意義について助言した)。

註

- (1) Instructional Resources: Vas Prabhu, "Contemporary Art: Familiar Objects in New Contexts." *art education*, vol.43, no.4, pp.25-32., July 1990.
- (2) 岡本芳枝「「美術館教育」の現状—NYの研修に参加して」『中國新聞』文化欄、1993年4月26日
- (3) Philip Yenawine, "How to Look at Modern Art." Harry Abrams, Inc., New York, 1991. フィリップ・イエナワイン、木下哲夫訳『モダンアートの見かた』美術出版社、1993年
- (4) 資料『ミュージアム・アドベンチャー 第3回“ストライプ物語”(広島市現代美術館)』を参照。
- (5) 編集: 愛知県美術館 (寺門臨太郎・拝戸雅彦)、山口県立美術館 (斎藤郁夫) 『パウル・クレーの芸術』愛知県美術館・中日新聞社、1993年。本図録をメンバー全員が参照。
- (6) 斎藤郁夫「クレーと近代芸術—クレーの造形思考とフィードラーの芸術論をめぐって」同図録 pp.25-29.

II-1 「パウル・クレーの芸術」展の鑑賞題材化: 隅 敦

1. 展覧会の題材化のポイント

「パウル・クレーの芸術」展は、日本における最大規模のクレー回顧展であり、この規模としては今世紀最後の回顧展になるだろうと思われる。作品総数は269点(図録には272点が掲載)に及び、活動初期から晩年、それこそ死の直前までの作品が一堂に集められている。

今回、演習課題として、本展覧会を鑑賞教育の領域において題材化するにあたり、どのような点がポイントになりうるかについて考えた結果、次の3点を導き出すことができた。

まず第1点は、展示作品数が多く、表現内容が豊富なので、様々な観点から鑑賞対象として作品を選ぶことが可能であるという点である。

クレーの作品は、1言で言えば、多様である。また、別の見方をすれば、画家のアイデンティティや活動の一貫的展開が見えにくい作品だと言うこともできる。クレーは約10000点の作品を遺しているが、その表現様式は様々に変遷し、様々なモチーフを様々な表現方法で表現しており、鑑賞教育の対象としては扱いにくい印象を受ける。

しかし、逆に言えば、その多様性は非常に刺激的であり、クレーの創造的資質の豊かさを証するものである。1人の画家の生涯における創造性の拡がりの可能性について知ることは、鑑賞指導の有意義な目標になると思われる。また、クレーは水彩、油絵、エッチング、鉛筆や墨による線描等の多種の描画表現を試み、加えてキャンバスや紙だけでなく、厚地の黄麻布や板や新聞紙等、様々な基底材の実験も試みている。そうした表現技法の拡がりは、児童の表現技法の拡がりを考える上で重要なヒントを与えてくれると思われる。

第2点は、クレーが創造活動の範を子どもの表現に求めたという点である。以下は、この点に関するクレーの言葉である。

「子供の絵は「脳髓からしほり出された」ものでないために、クレー自身の絵より優れている¹⁾。」

「この根源的な芸術は子供でもできることなのです。そしてまさに子供でもできるということに、叡智がひそんでいるのだ²⁾。」

クレーの色や形の表現には、大人の影響をまだ受けない、子どもの純粹無垢な感受性と同質のものを感じ取ることができる。中原佑介は、クレーと子どもの表現の関係について、次のように論じている。

「クレーは、たとえばまず印象派の洗礼を受け、ついで、その限界を超えようとして自分の歩みを始めたというような画家ではなかった。いってみれば、彼は幼時の描くことへの関心をそのまま持続させ、そこから、描くことの意味を掘り下げて普遍化させようとすることによって画家となったというような存在であった³⁾。」

クレーの制作の意識が子どもの表現の方に向いていたとするならば、逆に今度は、子どもが興味をもってクレーの作品を受け止めることもそう困難ではないと言えるかも知れない。もともと子どもは先入観・偏見等がない状態で、素直に絵画を鑑賞することが可能である。大人になれば、美術作品に対する固定観念が増し、また、それが解らなければならぬというプレッシャーを自らにかけて、結果的に美術作品から足が遠のいてしまうことが多い。子どもの表現から創造的エネルギーを得続け、また、感受性が痩せ細った大人になることを拒否する姿勢を取り続けることにより、クレーがその絵画表現を革新していったと捉えるならば、子どもこそクレーの作品の鑑賞者に相応しいとすることができる。同時にまた、大人になっても子どもと同じ心で美術作品を鑑賞することができる者は、クレーの作品を心から楽しみ堪能することができると思うのである。

第3点は、この展覧会をきっかけにして、美術館に出かけて作品を鑑賞しようという意識を高めることが可能になるのではないかという点である。

本展覧会は、会期が約2箇月と長い。その間、テレビ・新聞・雑誌等のマスコミでは展

覧会のことを盛んに宣伝し、ポスターもあちこちに貼られているので、展覧会に対する児童の認知度は高いと思われる。また、パウル・クレーという名前を何度も耳にしているので、その名前に親密感を抱いていることが予想される。そこで、この機会に1歩進んで、本展覧会を学校教育の場で取り上げることによって、児童が美術館での展覧会鑑賞に親しみ、美術館をより身近な存在に感じられるようになり、さらには美術を愛好する基本的態度が養われることを期待するものである。

2. 題材設定の理由

(1) 美術館教育からの示唆（広島市現代美術館における鑑賞教育プログラムに参加して）

欧米主導型であった美術館教育が、近年、日本でも各地の美術館で次第に活発に展開しだしてきている。実技講座や作品解説を中心とする従前型の美術鑑賞講座に加え、ワークショップや館所蔵作品・企画展等をもとにした鑑賞教育といった、新しい発想に基づく諸種の取り組みが登場している。

勿論、美術館におけるそうした取り組みは、社会教育の範疇に属するものであるから、学習指導要領によって教育内容が法的に規定され、評価・評定が義務づけられている、学校教育にそのままスライドできるものではない。

しかし、美術教育の理論的研究が早くから進んでいたアメリカでは、学校教育における鑑賞教育と美術館教育の相互交流が盛んであり、美術館で実物の作品を前に鑑賞授業を行う光景がよく見られる。特に制作・批評・歴史・美学の4領域を統合し、質の高い美術教育を目指す、DBAEの理論が普及しだしてからは、鑑賞教育の比重がより高まってきている。学習指導要領のような国内の教育を統一する法的基準をもたないアメリカでは、日本と比較して、美術館活動との連携・共働がしやすく、また、良質な理論に基づく独自の鑑賞教育カリキュラムを構想しやすいと思われる。そこで、日本においても社会教育・学校教育という両者の立場の違いを1度取り払って、学校教育が美術館教育のよいところを積極的に取り入れ、鑑賞教育の実多き発展を図ることが必要であると考えられる。

広島市現代美術館では美術館教育に力を入れており、ワークショップや美術講座の開催、来館者の作品鑑賞を補助するワークシートの作成等、種々な活動を実施してきている。当館で教育普及活動を担当する岡本氏は、ニューヨークでの美術館教育研修ツアーに参加してきており、その研修体験を基礎に、今春から「ミュージアム・アドベンチャー」と題する、子ども向けのユニークな鑑賞教育プログラムを企画・実践している。隅は新聞でこの活動を知り、鑑賞教育に関する多くの有意義な資料が得られるだろうと思ったので、長女・杏奈（7歳、小学校2年生）と長男・卓真（5歳、保育園年長）をこの活動に参加させることにした。県外からの参加ではあったが、岡本氏を初め美術館側は、隅の事情を理解し、参加を快く承諾してくださった。

この子ども向け鑑賞教育プログラム「ミュージアム・アドベンチャー」は、小学校全学年の児童を対象とし、参加者は公募形式で募集される。毎月第2土曜日（8月を除く）に開催され、参加費は無料である。

そこで、隅の子どもが参加した、第2回「ミュージアム・アドベンチャー」の内容を簡潔に紹介したい⁴⁾。

a. 題名：「えのぐのイロイロ」

b. テーマ：絵具の盛り上がりや、使い方によっては、イリュージョンを生み出し、あるいはオブジェとしての絵を意識させることに、絵具の効果の違いを見る。絵具の使い方にも、

作家それぞれの個性があることを理解する。

c.鑑賞作品：金昌烈「『解体』ENS 8700 2」

白髪一雄「天祐星金鎗手」

モーリス・ルイス「ワイン」

ジュリアン・シュナーベル「無題」

子どもたちはイエス・ノーが書かれたカードをもち、各作品について出される簡単な問題（「イエス&ノー クイズ」）に、そのカードを使って答える。問題は絵具の様々な性質・表現に関するもので、その問題を通じて、作家の独自の絵具の使い方を諸観点から学べるようになっている（図1、図2参照）。



図1 活動場面1：スタッフ（左）が問題を提示し、岡本氏（右）が作品解説を交えながら、「イエス&ノー クイズ」を進める。鑑賞対象：シュナーベル「無題」。



図2 活動場面2：岡本氏の問題に、イエス・ノーカードで元気よく答える子どもたち。鑑賞対象：ルイス「ワイン」。

例えばルイスの「ワイン」の場合、「茶色に見えるけど、いろんな色がかかれています。これなあに？」という問題で、子どもたちを作品にまず惹きつけてから、その問題に関連する次の小問を出す。

- 1.これは色がまざったものである。イエス ノー
- 2.これはパレットの上でまぜた色である。イエス ノー
- 3.色のおくにはもっと何かがありそうだと思う。イエス ノー

クイズはテーマに基づいて緻密に構成されている。こうした絵具の表現の具体的側面を扱う問題を、子どもたちに表情豊かに語りかけながら考えさせることで、絵具の表現に対する関心が高まり、知識・理解が自ずと増すようになる。参加した子どもたちは、作品の前で繰り出される問題に、次々とイエス・ノーカードで答えながら、作品に親しんでいった。隅の子どもも、楽しい雰囲気の中で、初対面の子どもたちに気後れすることもなく、熱心に問題を聞いて答えていた。

この活動の成果は、その直後に観察することができた。プログラムを終えて、家族でもう1度常設展示場を回っていると、長女がチャック・クロースの作品（「ジョージア／フィンガーペインティング」）に近づいて、「この絵、指で書いたのね」と言った。確か

にその作品は、指に絵具をつけて、スタンピングの要領（指紋）で少女の顔を表現したものであった。「ミュージアム・アドベンチャー」での活動を通じて、明らかに鑑賞の観点が養われたのだと思われる。長女はさらに立体作品がどうやってつくられているのかにも興味をもちだし、様々な表現手法による現代美術作品に親しんでいた。また、5歳の長男も多様な作品の展示を喜んでいて、こうした子どもの鑑賞活動を前に、作品鑑賞は自分なりの観点をもって楽しむことが基本であり、その活動を知的理解の側面に限定する必要はないことを確信した。

作品鑑賞に関して言えば、これまでは美術作品を「分かる」基準が確立されているという先入観が強く働いて、その基準を知らなければ鑑賞の資格がないという意識が、鑑賞者の間に根強くあったように思う。さらに「分かる」基準が画一化し、「分かる」作品は価値があり、「分からない」作品は価値がないという共通認識が生まれ、特に抽象的な美術作品がそのような観点から冷遇されてきたと思われる。しかし、作品を表現技法等の多様な観点で見直してみると、今まで気づかなかった諸種の創造的側面が見え出し、「分かる」という概念が、実は非常に狭く限定された概念であることに気づかされるのである。

「ミュージアム・アドベンチャー」の活動では、どれも難解な作品であるのに、絵具の性質・表現という鑑賞の観点を設けることで、活動目標が明確化し、同時に鑑賞意欲が刺激され、最終的には作品を深く理解させる有意義な鑑賞活動が展開できることが証明された。このようなアプローチから鑑賞教育に関する大事な示唆を得ることができた。

抽象的な美術作品は「よく分からない」という意識を、早い時期から植えつけてしまうのは、鑑賞教育の観点より問題である。例えば小学校低学年では、「色が綺麗だから好きだ」「形が面白いから好きだ」というように、まずは各々の見方で作品を自由に楽しむ活動から鑑賞授業をスタートさせるよう心がけるべきである。さらにその活動を深め発展させるためには、「ミュージアム・アドベンチャー」のように、教師が的確で楽しい鑑賞の観点を、児童の興味を惹く方法で提示する必要がある。「ミュージアム・アドベンチャー」の活動を経験して、活動内容を子ども向けにアレンジし、また、言葉の選び方や表現に気をつければ、小学校低学年児童でも美術作品の鑑賞は十分可能であることを知った。勿論、そのために教師は鑑賞対象について幅広い知識・教養を身につけることが必要である。

(2) 本題材の具体的な指導について

以上、述べた事柄を踏まえ、クレー展をもとにした鑑賞題材を構想するにあたって、その具体的な指導の方途について次に考えてみたいと思う。

①対象学年

現行小学校学習指導要領には、第5・6学年の鑑賞の独立的指導が明記されているが、本題材では、あえて実験的に低学年を対象に美術作品の鑑賞を目的とする授業を構想することにした。クレーが子どものような心情で描いた絵画作品を見て、当の子どもがその表現に親密な印象を覚え、豊かな鑑賞活動が展開するであろうことや、「ミュージアム・アドベンチャー」の参加経験から、指導次第では低学年児童にも鑑賞の理解が可能であることを知ったことなどが、上記授業を構想しようと思った理由である。対象学年を第2学年とするが、今回、勤務校（下松市立中村小学校）を1年間離れることになり、実際に小学生を前にして鑑賞授業を行うことが不可能なので、隣の子どもに対して試験的に授業を行うことを考えている（本題材による鑑賞授業の他の実現の可能性を演習で協議したとこ

ろ、最終的に「美術科教育法Ⅰ」の授業で、学生を対象に模擬授業を行うことが決まった)。

②授業の組立て

授業のタイトルを「びじゅつかんでクレーの絵をかんじてみようよ」とし、1人1人が各々の感じ方で気楽に楽しく作品鑑賞ができるよう配慮することにする。

本題材では、アナレス女史の理論(Ⅰ-1.参照)に基づき、鑑賞能力の発達の第2段階に達することを主たる目標と考えている。まずはこの授業を機会に、美術館や美術作品が身近に感じられるようになればいいと思う。今回の鑑賞授業を通じて、展覧会鑑賞に親しみ、美術作品の面白さを体感した子どもが、今度は家族でクレー展や別の展覧会に行ってみたいと思うかも知れないし、また、家の書棚で埃を被ってしまっている美術全集を開いてみようとするかも知れない。そうなれば、鑑賞能力が第3、第4段階へと発展していく可能性も開けてくる。

次に指導の流れについて解説する。

展覧会場に入る前に、まずクレーの背景について簡単な説明を行い、数点の自画像を見せて、多様な表現方法で表現した画家であることを紹介する。

次に、教師が事前の展覧会鑑賞をもとに選んでおいた作品5点を鑑賞する。作品の前に児童を集め、色や形、題名や主題・表現意図に関わる内容等について、主要な質問を3つずつ出しながら、作品について児童と対話する。ここでは「えのぐのイロイロ」でのクイズの活動形態を導入することで、いろいろな見方で作品を鑑賞できるようになるきっかけを与え、楽しい作品鑑賞の時間としたい。質問に対しては、「はい」:白色、「いいえ」:黒色、「うん?」:灰色の3本のカードの中から、1本を選んで挙げて答えさせる。最初の作品の鑑賞を終えたら、次の作品の鑑賞に移る。この活動では、教師の感想を押しつげずに、児童1人1人が感じたり思ったりしたことを大切にするようにしたい。

最後に、集合の時間と場所を確認してから、今度は自由に展示作品を見て回らせ、自分の気に入った作品を1点選んで心に刻むようにさせる。

質問をするために取り上げる作品5点の順番は、会場をスムーズに移動しながら指導できるように、展示順とする。また、指導に支障を来さないために、作品が展示されている場所・階等を計算に入れて、作品を選ぶ必要がある。表現内容に関しては、点・線・面といった基本的造形要素の表現や絵具・画肌の質感の表現等が比較的捉えやすいもの、さらに小学校低学年を対象とするために、題名と表現内容が結びつきやすいものを選ぶのが望ましいと思う。以上の点を考慮し、本題材では次の5点を選んだ。

「南方の庭(図5。図版は本章最後に一括掲載)」「バラの風(図6)」「家族の散歩・テンポ2(図7)」「母と子(図8)」「町の前に立つ子どもたち(図9)」。

③指導にあたっての留意点

本題材は、山口県立美術館に実際に出向いて、そこで実物鑑賞による鑑賞授業を実施することを前提に構想したものである。本展覧会は、クレーの回顧展としては日本で最大級のものであり、連日、相当数の入場者が訪れている。そこで、「他の鑑賞者に迷惑をかけない」「作品を大切に使う」といった、鑑賞時の基本マナーを児童に指導する必要がある。特に最後の自由鑑賞の時間には、鑑賞マナーの指導の徹底が必要である。低学年児童であるから、思わず材質を確かめようと、手で画面に触れようとするのが予想されるので、その点の注意は徹底しておきたい。今後、家族や友達と展覧会を鑑賞することも考え

られるため、鑑賞マナーはできるだけ早い時期から身につけさせることが大切である。

また、授業を進めるにあたり、他の鑑賞者への配慮が必要である。クレーの自画像を示す最初の活動では、会場入り口脇の通行の邪魔にならない場所を確保し、また、指導者はできるだけ小さな声で話しかけ、質問にはカードを使って答えさせ、児童の発言をある程度制限するようにする。

しかし、だからと言って、ただ規則で縛るような授業を行うのではなく、指導者は児童の前に立つときには表情豊かに、さらにユーモアを交えながら、できるだけ楽しい鑑賞活動になるよう努めるべきである。また同時に、児童の見方や感じ方を素直に受け止め共感する態度も必要である。

3.2種の鑑賞指導を経験して

前述したように、本題材に基づく授業実践を実際に行うことが不可能であったので、最初、休日を利用して、小学校2年生の長女を対象に、美術館で学習指導案(Ⅲ-1. 参照)をもとに鑑賞授業を試みることを計画した。しかし、後に演習で実際の形態に近い鑑賞授業を試みることにについて協議した結果、「美術科教育法Ⅰ」の受講生を対象に、模擬授業の形で授業実践を行うことが決まった。

偶の長女を対象にした授業では、1の活動を自宅で、2・3の活動を美術館で行った。

学生対象の模擬授業では、学習指導案の1～3までの活動を行った。ただし、実物の鑑賞ができないので、図版資料(A4版インスタントプリントカラーコピー)を提示するとともに、実物投影機で同資料をモニターに映すという手法で、作品を鑑賞させた(図3、図4参照)。

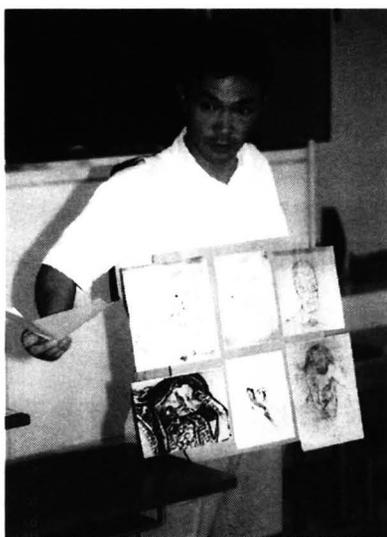


図3 模擬授業風景1：自作ベストを着、サンドイッチマンを連想させる偶。覆いの紙を取り除き、真中上の自画像(「無題(沈潜)」)を学生に見せた瞬間。ベスト背面には、クレーの顔写真が貼られている。



図4 模擬授業風景2：3種のカードで質問に答える学生。

2種の指導を通じて、授業の仕組み方と深く関係する興味深い結果が得られた。そこで、まず長女を対象にした授業の指導記録の1部を紹介したい。

* 「南方の庭」に関する質問と答

Q1: 温かい感じの絵だろうか？それとも寒い感じがする絵だろうか？

A: 温かい感じの絵。いろんな色があるから。赤、黄、青がある。青も空の色だから温かい色の仲間。

Q2: 明るい感じがする絵だろうか？それとも暗い感じがする絵だろうか？

A: どちらの色もあるのでよく解らない。

Q3: どうして暗い色も使っているのだろうか？

A: 暗い色を使うと、綺麗な色がまた綺麗になるから。

ここで質問と答の内容を簡潔に分析してみたい。

Q1&A: 指導者には赤や黄は暖色で、青は寒色であるという、色彩の性質に関する基本概念がある。しかし、まだそのような色の分類について知識をもたない子どもにとっては、青は寒色ではなく、温かい陽光が満ちた青空の色を意味し、暖色の1種と解釈される。

Q2&A: 質問する側は、明らかに明るい感じがする絵だと思って、その答を期待していたが、子どもにとっては明るい・暗いの明確な区別が困難である。

Q3&A: 子どもには明るい色を綺麗な色と捉える傾向が認められ、ここでは暗い色が明るい色の綺麗さを対比的に強調するという考えが示されている。

このように、子どもの答には、指導者の先入観を覆したり、指導者の予測を越えたりするものが数多くある。この事例をもって結論づけることには無理があるかも知れないが、一般に子どもは暖色・寒色等の客観的知識によって答えるのではなく、その時々に関心を感じたままを表現していることが理解できるのである。

この事例に対し、学生対象の場合は、事前に小学校2年生の見方・感じ方で答えるように求めたにもかかわらず、ほとんどの者がこれまで学んできた知識を基に答えており、指導者が予測した範囲内の答が大半を占めた。例えばQ1に対しては、6名中5名が温かい感じと答え、1名が温かいという表現だけでは物足りない感じがするという主観的感想を述べている。他の作品についての質疑応答でも、指導記録を読み直すと、同様の答が多いことに気づく。先の事例と同様、事例数が少なく、この事例をもって結論づけることは無謀であると思われるが、美術専攻の学生の場合には、これまで受けてきた美術教育によって得た、暖色・寒色等の色彩に関する一般的知識を判断基準としていることが理解できる。

ここで、授業者の立場から反省を述べたい。クレー展を題材化する際に、クレーが子どもの絵に絵画表現の本質を見ていた事実を踏まえ、子どもらしい感じ方を大事にしようと考えたつもりが、授業を仕組む段階で、無意識の内に大人の感じ方によるある種の決めつけを行っていたように思う。例えば「南方の庭」については、暖色を多用することで温かい雰囲気を表した絵だと決めつけていた。この指導姿勢は、クレーの作品を素直に受け止めることを鑑賞活動の柱としながらも、授業者自らがその展開の芽を結果的に摘んでしまうという、矛盾に満ちた事態を招くものであった。

確かに「南方の庭」は、クレーがチュニジア旅行を契機に開発した、色彩表現を中心軸とする一連の絵画作品の内の1点である。この作品には、クレー独自の色の配置構成法によって、当地の明るい色彩と陽光、鮮やかなイスラム教的景観が表現されているのは事実

である。しかし、その表現の美術史的背景を知ることで得た、チュニジア＝北アフリカ＝暖色といういかにも単純な図式で、クレーの表現意図を読み取ることは一面的であると言えないだろうか。クレーにとって青は赤や黄とは異なる暖色の働きをもつ色彩であったのかも知れない、といった想像力に富んだ見方が、児童の自由な鑑賞活動の中では積極的に登場すべきだと思うのである。

今世紀初頭の芸術運動の中で、クレーが果たした役割について理解し、さらにクレーの絵画表現の展開過程に関する十分な予備知識を身につけて、今回のような展覧会を鑑賞することも意義のあることではある。しかし、作家の手を1度離れた美術作品の解釈は基本的に自由であり、それを見る者は各々異なる個別的な印象や感情を受け取るものである。鑑賞活動は知識・理解から入るのではなく、まず自由に見て感じ感動することからスタートすることが基本だと思える。それから、さらに主体的態度で深く知ろうとする探求的活動が発展していく方が望ましい。

美術教育においてこれまで以上に鑑賞が重要視されるようになり、1歩進んだ鑑賞教育のあり方を追求していくためには、従来通りの知識偏重型の画一的な鑑賞の方法に頼っていたのでは駄目だと思われる。これからの鑑賞教育は、まずこう見なければならないという鑑賞基準を提示することの無意味さを知り、作品の見方の自由度を拡張する鑑賞活動を展開することに重点を置くべきではあるまいか。授業者は常に見ることの意義を確認しながら、より豊かな鑑賞活動が行われることを目標に、実践を繰り返す必要がある。今回の指導を通して、「見る、そして、感じる」ことの意義を改めて確認することができたことは大きな収穫であった。

註

- (1) 監修: 中山公男、監修補佐: 保井亜弓、図版校閲: 東海林玉樹『週間グレート・アーティスト パウル・クレー』(第1巻第21号) 同朋社出版、1990年、p.11(649).
- (2) “Tagebücher Paul Klee.” Verlag M. DuMont Schauberg, Köln. 南原実訳『クレーの日記』新潮社、1961年、p.292.
- (3) 中原佑介「作家論: クレーの生涯と作品」監修: 梅原龍三郎・谷川徹三・富永惣一、解説: 中原佑介『クレー』(現代世界美術全集13) 集英社、1971年、p.83.
- (4) 資料『ミュージアム・アドベンチャー 第2回 “えのぐのイロイロ”(広島市現代美術館)』を参照。

II-2 「パウル・クレーの芸術」展の鑑賞題材化: 小田村泰彦

1. 展覧会の題材化のポイント

今回、開催されたクレー展の魅力の1つに、展示作品の数量の多さを挙げることができる。しかもただ多いだけでなく、クレーは制作にあたり、常に様々な表現技法・表現メディア等の実験を試みていただけあって、その作風は各時期で異なり多種多様である。そのため、クレーの場合、他の作家のように作品から作家のイメージを絞り込んで理解することが容易でない。小田村は、クレー芸術のそんな多面的なところに人間臭さを感じるのであるが、果たして児童はどう感じるのだろうか。また、どう感じさせるべきなのだろうか。

作風が多種多様であることによって、児童が自分の好みの作品を選ぶ際の選択の幅は必然的に広がる。どの作品を選ぶかは、児童1人1人が育ってきた環境や美的嗜好・価値観

によって違ってくるものだ。初期の風刺画のような作品に惹かれる者もいれば、北アフリカ旅行を契機とする色鮮やかな水彩画に惹かれる者もいるだろう。

しかし、クレーの作品には難解な表現も多く、例えば抽象的要素が濃い作品を鑑賞する場合、鑑賞の観点が不明瞭で漠然としているために、「何となくだけど、あの絵がよかったなあ」ぐらいにしか感じられないで展覧会を後にすることも考えられる。もしそういう鑑賞が続けば、児童の鑑賞活動をよりよいものにするにはできないはずだ。

そうならないためには、児童の鑑賞活動を援助する諸種の手立てを工夫し、児童と作品の間に親密な関係が構築されることが必要になる。広島市現代美術館で美術館教育を進める岡本氏は、アナレス女史の鑑賞能力の発達段階に関する理論（I-1.参照）を紹介しており、その最終段階の状態を、「作品と対話するかのような深い思索ができる」とまとめているが、そのような状態は鑑賞指導の最終目標でもある。

幸いなことに、クレーの作品は、同時期に活躍したモンドリアンの作品や、広島市現代美術館が所蔵するステラの作品程、抽象表現の度合は高くない。ゆえに、児童が作品に何が描かれているのかさっぱり解らないまま、作品を見るのを断念し、深い思索に入ることができないという事態にはならないと思う。

また、クレーの作品の多くは、子どもの絵に似ている。それは偶然の結果ではなく、クレーは、画家の観点から、子どもの絵を、目に見える世界の背後に潜む、現実の根源的な姿を映し出すものと考え、強い興味をもっていた。例えばいろいろな場面に登場する記号のような簡潔な表現は、子どもの絵と共通する要素である。そのような児童にとって親しみやすい表現に注目させ、それをきっかけに、「クレーは何を描こうとしていたのか」、あるいは、「クレーはそのとき何を考えていたのか」という、鑑賞活動の実質的進展を促す問いを抱かせることにより、思索を深め豊かにすることができると思われる。

最後にもう1点。クレーは絵画制作に関する諸理論を編んだ著書や、日々の出来事を綴った日記を遺している。そこで、児童が、もしある作品を見て、その背景に興味を覚えた場合、クレーの著書・日記が役立つと思われる。児童が自分で読んで背景を推測・理解する学習展開がベストであるが、難解で高度過ぎる箇所も多いので、指導する側が児童に理解できるような話を考え、それを読み聞かせることで、児童を深い思索に導くことができると思う。

以上のようなクレー展ならではの鑑賞のポイントを、授業の実際的場面にどう盛り込んでいったらよいかということについては、次節で解説する。

2. 題材設定の理由

美術作品を鑑賞する場合、展覧会で実物を見るのと、スライドや図録・教科書・美術全集等で作品を見るのでは、体験の質が明らかに異なる。前者では、作品のあるがままの状態を目にすることで、強いインパクトを得ることができる。だが、1度限りの鑑賞を中身濃いものにするためには、多くの時間を費やして下調べを行う必要がある。逆に後者では、作品鑑賞の臨場感を味わうことにおいては限界があるが、何度でも見ることができ、また、印刷の状態から想像が働いて、実物鑑賞よりも味のある鑑賞になりうることも考えられる。各々もち味があると言えるが、本題材では、今回の貴重な機会を捕え、前者の実物鑑賞を取り上げる。

本題材で掲げる目標は2つある。第1の目標は、児童が各々のテーマを決め、主体的に

鑑賞する態度を養い、鑑賞の面白さを味わわせることである。そして、第2の目標は、クレーの作品との対話を通じて、鑑賞対象に対する自分なりの想いを抱くことができるようになることである。

鑑賞の一般的方法として、児童に一番好きな作品を1点選ばせて、その色・線・形等の諸要素を様々な観点から分析させることが考えられるが、本題材では最初にテーマに関わる好きな要素を発見させることにした。なぜなら、クレーのような抽象的傾向が強い作品を見る場合、選んだ作品の諸要素の造形的関係（横軸）を分析するよりも、ある要素が諸作品を通じてどう変化したか（縦軸）を考える方が、作家のコンセプトを理解しやすいと思ったからである。

そこで、事前授業においては、「矢印」という特徴的な1形態に照明を当てて、それをテーマとする鑑賞活動を進める。その形態が認められる、「バラの風（図6）」「当惑する場所（図10）」「夕景の分析（図11）」「ぐらついたバランス（図12）」の4作品を取り上げ、個々の表現の中で矢印が何を意味するのかを考えさせることにより、テーマを設けて鑑賞する態度を養いたいと思う。

そのとき、自分の想いを自問自答形式でワークシートに書かせようと思うが、作品との対話の練習をするには、その方法が最適であると思った。また、児童の中には、想像力が旺盛過ぎて、極めて主観的な想像の世界に足を踏み入れてしまい、作品とうまく対話することができなくなる者も出てくるはずだ。そんなときには、1度作品鑑賞を離れ、クレーの著書・日記を読み聞かせたり、クレーが活躍した当時の時代背景を明らかにしたりするなど、鑑賞の行き詰まりを打開する諸種の援助が必要になる。

美術館での展覧会鑑賞では、大人になって恥ずかしい思いをしないためにも、基本的な鑑賞マナーは徹底して指導しておかなければならない。

事前授業での活動内容を踏まえ、実物を見て、テーマに関わるキーになる要素を発見させ、それをもとに作品との対話を深めさせる。そのとき、もしテーマをなかなか探し出せない児童がいたら、教師はその児童にとって一番印象に残った事柄を会話を通じて聞き出すなどして、諸観点よりテーマについて考えさせることが必要である。

美術館での鑑賞授業を終えて後、何もしないのでは、鑑賞能力は向上しないし、将来に向けて鑑賞活動を発展させることは難しくなる。そこで、友達の見方・考え方を知る意見交換や討議等の場を設け、新しい観点を発見させる展開が必要になってくる。「○○君は、ああいう見方をしていたのか。また展覧会に行く機会があったら、自分でもそれを試してみよう」という気持ちを起こさせることが大事である。また、展覧会と関連する表現活動の場を設け、鑑賞で得たアイデアを様々な形に表現することも有意義だと思われる。

このような一連の活動は、小学校6年生児童には無理だという声があるかも知れない。しかし、鑑賞活動における思索の深まりを目的とする本題材は、1度は取り組んでみる価値があるように思える。

参考文献

- * Frank Whitford, "Understanding Abstract Art." Roxby Art Publishing Ltd., 1987. フランク・ウィットフォード、木下哲夫訳『抽象美術入門』美術出版社、1991年
- * Rosemary Lambert, "Cambridge Introduction to the History of Art: The Twentieth Century." Cambridge University Press., Cambridge, 1981. ローズマリー・ランバート、高階秀爾訳『20世紀の美術』（ケンブリッジ 西洋美術の流れ7）岩波書店、1989年

II-3 「パウル・クレーの芸術」展の鑑賞題材化: 伊藤和子

以下に、クレー展を鑑賞授業の題材に取り上げた、2つの理由について述べる。

なお、事前授業では、次の7点の作品を鑑賞対象に取り上げることにする。

「イタリアの町(図13)」「城の丘(図14)」「屋根の上の七時(図15)」「夕景の分析(図11)」「パルナツソスへ(図16)」「無題(死の天使)(図17)」「死と浄火(図18)」。

1. 第1の理由

美術教育においては、これまで表現者を育てる側面に重点が置かれてきたように思うが、これからは審美眼を備える鑑賞者を育てる活動にも力を入れるべきである。

今の世の中には、多種多様な美的イメージが溢れている。それらが次から次に積みかけるように生徒の前に現れ、多くの場合、無思慮な態度で受動的に消費されている。そこで、望まれるのは、そのイメージが本当に美なのかどうか、または、美と言うにはどこか問題がありはしないかを、生徒自身の価値基準で主体的に見極められるようにすることである。

美は美術教育の中心的主題である。形態にしろ、色彩にしろ、構成にしろ、それらはすべて美に関わる事象である。その性質・様態や原理的側面を学習しながら、そこに内在する美の認識を深めることが大切であると思われる。

そこで、美を認知・理解する能力を養い、さらには美術活動の確固たる基盤を構築するために、美を諸角度から分析・考察し、独創的な造形理論に基づく絵画表現を展開した、クレーの画業を鑑賞することは有意義であると思われる。それがクレー展を鑑賞題材に取り上げた、第1の理由である。

クレーは、学問的とも言える姿勢で、美について徹底的に研究し、美を構成する諸種の造形要素がどんな意味・働きをもつのかを、視覚言語的観点から分析している。また、画家であると同時に、教育者でもあったクレーは、造形観・表現意図等を詳しく記した論文・著書を多く遺し、それらは鑑賞の折に参考になる。クレーの作品は、生徒にとって、形態・色彩・構成等の美を理解するための、優れた鑑賞教材になりうると思われる。

2. 第2の理由

クレーは真に美の創造者だと言えるが、なぜ生涯をかけて美を追求し、美を表現し続けたのだろうか。その優れた創造活動の背後には、一体どんな価値観が働いていたのだろうか。

クレーの人生観・世界観・宇宙観は、ある種の美学的意識を基盤に形成されたものである。その特徴は、諸々の事象を生成的・運動的に生み出す原動力として、両極的性質をもつ2種の要素の働きを考えている点である。例えば白と黒、明と暗、動と静、善と悪、生と死等である。

クレーは色彩の階調的表現を軸とする多種の作品を制作している。グラデーションによる表現では、両端の色が次第に移り行く運動的表現効果の中に、美の本質的現れを感じていたのではないだろうか。

そうした捉え方が、最終的には生と死という、まさしく両極的な根源的事象の問題に適用される。クレーが生と死の問題をどう捉え、作品の中にその主題をどう表現してきたかをじっくりと見つめる必要がある。クレーは生と死という両局面の間を往復するようにし

て、時間的には限られている人生をダイナミックに把握し、生きることに関する諸省察を多様な方法で作品の中に表現した。

この生と死の問題は、クレーにとって本質的テーマであると同時に、不安定な要素に満ちた思春期のただ中にいる中学生にとってもそうであるはずである。それゆえ、クレーの作品は、生徒が親しみ共感的に理解できる鑑賞対象になるだろうと思われる。それが第2の理由である。

クレーの作品を前に、生徒が生きることの意味を真剣に考え、そうすることで磨き高められる自己を、さらに何らかの形で表現できるようになってほしいと思う。

参考文献

- * Paul Klee, "Das bildnerische Denken: Schriften zur Form- und Gestaltungslehre." hrsg. und bearbeitet von Jürg Spiller. Benno Schwabe & Co. Verlag, Basel/stuttgart, 1956. パウル・クレー、ユルク・シュピラー編、土方定一・菊盛英夫・坂崎乙郎共訳『造形思考 [上/下]』新潮社、1973年
- * Walter Mehring, "Verrufene Malerei." Diogenes Verlag, Zürich, 1958. ヴァルター・メーリング、野村太郎訳『呪われた絵画』美術選書、美術出版社、1962年

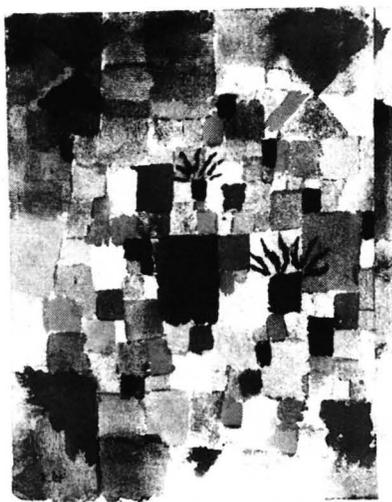


図5 「南方の庭」1919年、水彩、厚紙の上に紙、24.4×18.7cm (図14、図15は、『造形思考 [上]』p.214; 220.から転載。他は全部図録から転載)

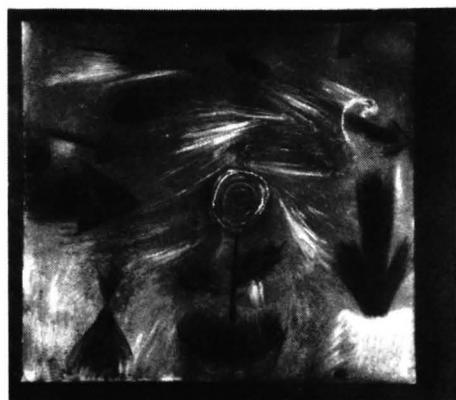


図6 「バラの風」1922年、油彩、厚紙の上に紙、42×48.5cm

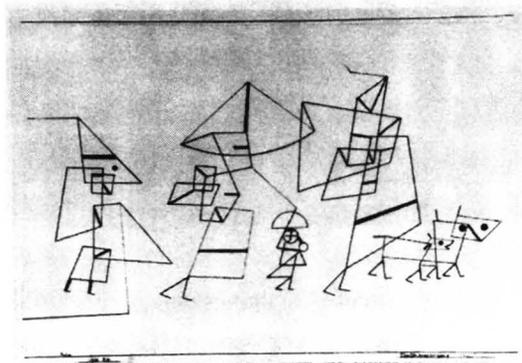


図7 「家族の散歩，テンポ2」1930年、
墨、水彩、厚紙の上に紙、40×
57cm



図8 「母と子」1938年、水彩、黄麻布、
56×52cm



図9 「町の前に立つ子どもたち」1928
年、水彩・油彩転写素描、厚紙の上
に紙、32.2×30.4cm

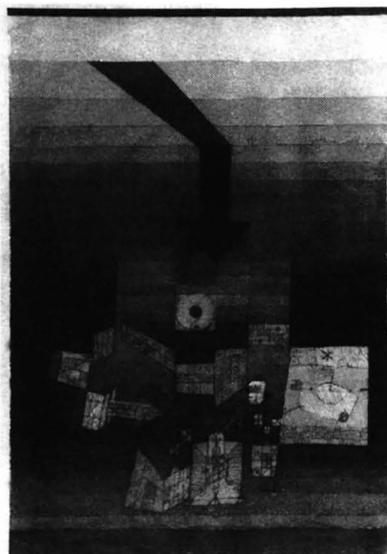


図10 「当惑する場所」1922年、水彩・
墨・鉛筆、厚紙の上に紙、32.8×
23.1cm



図11 「夕景分析」1922年、水彩、厚紙の上に紙、33.5×23.5cm

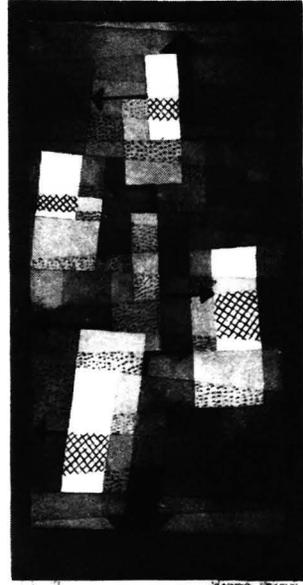


図12 「ぐらついたバランス」1922年、水彩・鉛筆、厚紙の上に紙、34.5×17.8cm

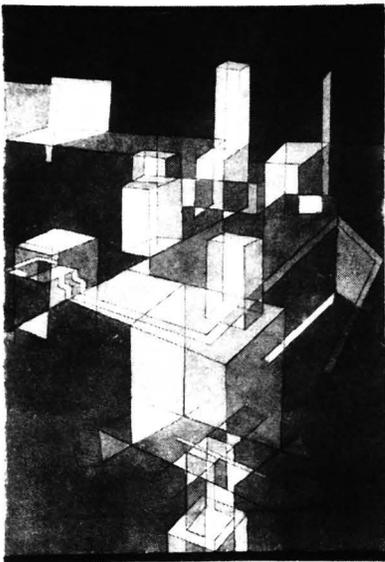


図13 「イタリアの町」1928年、水彩、厚紙の上に紙、34×23.5cm



図14 「城の丘」1929年、油

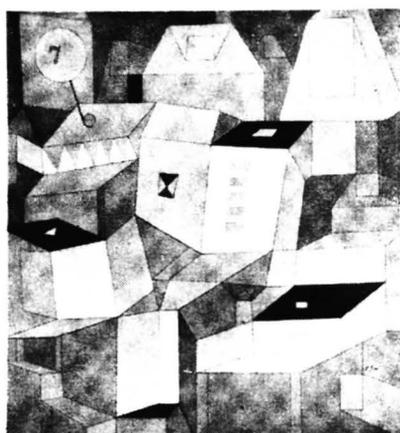


図15 「屋根の上の七時」1930年、油、テンペラ、ワニス塗り水彩

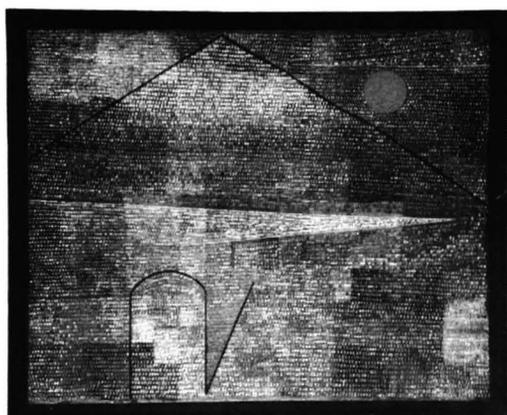


図16 「バルナツスへ」1932年、油彩、麻布；着色されたオリジナルの額縁、100×126cm（額寸109×135cm）

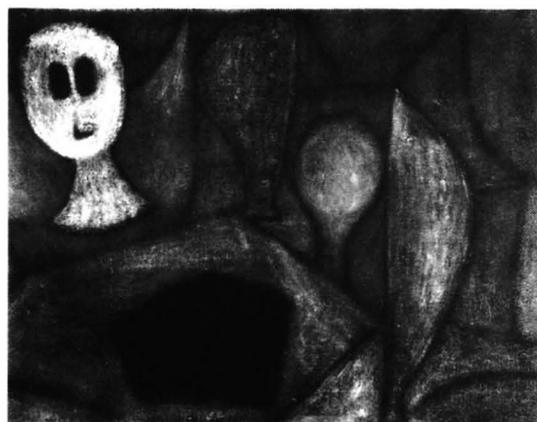


図17 「無題（死の天使）」1940年、油彩、麻布、51×66.4cm



図18 「死と浄火」1940年、油彩、糊絵具、黄麻布；オリジナルの額縁、46×44cm

III 3つの学習指導計画

1. 図画工作科学習指導案（第2学年）： 隅 敦

図画工作科学習指導案

第2学年

指導者 隅 敦

1. 題材 「パウル・クレーってなんだ？」

2. 目標

「パウル・クレーの芸術」展の鑑賞をきっかけにして、美術作品および美術館に親しみがもてるようになる。

3. 題材設定の理由

(1) 児童観（隅の勤務校である下松市立中村小学校がモデル）

児童は、鑑賞の学習としては、友達の作品をお互いに見合っ、その感想を言い合うことを経験しているだけである。山口県立美術館に来たことがある者は、昨年度の学校美術展覧会に入賞して、保護者に連れられてきた1名だけである。したがって、美術館がどういふ所であるかを余り意識したことがなく、興味・関心をもっていない者がほとんどである。

(2) 題材観

本展覧会のような大規模なクレー回顧展は、今世紀中にはもう実現しないだろうと思われる。展示作品数は 269点に及び、クレーが活動を開始した時期から晩年（死の直前）までの諸作品が展示されている。

クレーの絵画表現は、その多様性に特色がある。それゆえ、クレーの画業を1言で要約することは困難である。生涯に約 10000点の作品を描いているが、その表現様式は一貫しているとは言えず、様々なモチーフを様々な表現方法で表現しているので、鑑賞教育の題材にはしにくい面があると思われる。しかし、クレーの多様な表現を味わうことも、鑑賞活動の1つの重要な意義であると思う。

ところで、クレーは子どもの絵に魅せられ、「この根源的な芸術は子供でもできることなのです。そしてまさに子供でもできるということに、叡智がひそんでいるのだ」とまで言っている。そうしたクレーの色や形の表現には、大人の価値観に影響されていない、子どもの純真な感受性が息衝いているように見えはしないだろうか。

中原佑介は、クレーの画家としての資質について、次のように的確に論評している。

「クレーは、たとえばまず印象派の洗礼を受け、ついで、その限界を超えようとして自分の歩みを始めたというような画家ではなかった。いってみれば、彼は幼時の描くことへの関心をそのまま持続させ、そこから、描くことの意味を掘り下げて普遍化させようとすることによって画家となったというような存在であった。」

今回、第2学年児童にクレーの作品を見せ、その感想を自由に話してもらおうと考えているが、この活動を通して、子どもの絵に憧れたクレーの心を捉えてほしいという願いがある。

(3) 指導観

本指導では、美術作品および美術館が身近に感じられるようになることを目標にしている。まずは各々の見方で展覧会での作品鑑賞を楽しむことを第一義とすることを強調しておきたい。児童には評論家的観点から作品を見ることはまだ無理であり、特に抽象的表現の解釈は高度過ぎる課題である。そこで、一見難解なクレーの作品を前に、低学年段階の児童に、「よく分からない」という苦手意識を植えつけないように心がける必要がある。指導の方途としては、例えば「色が綺麗だから好きだ」「形が面白いから好きだ」というような、子どもの素直な受け止め方を賞讃してあげることなどがある。そうした指導の積み重ねが、結果的に生涯を通じて美術を愛好する態度を育てるものと思われる。

今回は、クレーの作品の批評的解釈を試みるという活動は控え、作品を何点か取り上げ、個々の鑑賞をゲーム形式で展開することで、いろいろな見方を自然に身につけさせたい。本展覧会はクレーの大規模な回顧展ということで、初期から晩年までの諸タイプの作品が展示されており、楽しい授業展開が期待できると思われる。

4. 指導計画（総時間数：2時間）

本時タイトル：びじゅつかんでクレーの絵をかんじてみようよ

：2時間

5. 準備物

教師：クレーの各時期の自画像（コピー）を貼りつけた教師自作ベスト、「はい」：白色、「いいえ」：黒色、「ううん？」：灰色の3本のカード

児童：腕時計

G. 本時案

段階	児童の活動	教師の手だて（主要発問）
課題の把握	1. パウル・クレーについての説明を聞く。 （一斉）	1. 上着を脱ぎ、クレーの様々な自画像を貼りつけたベストを見せ、関心を高める。 ・今から 100 年位前（1879 年）にスイスに生まれ、亡くなるまでに約 10000 点もの様々な表現様式の作品を描いた、という程度の紹介をする。 ・各時期の自画像の表現に相当の違いがあることを押さえさせる。
課題の追求	2. 「みんなの約束」を聞く。 （一斉） 3. ゲーム形式で行う鑑賞活動についての説明を聞く。 （一斉） 4. 作品を見ながら、質問に主にカードを使って答える。 （一斉） ・理由を問われた場合には、自分の考えを示す。	2. 美術館で作品を見る際の注意事項を「みんなの約束」として理解させる。 ・走らない。 ・大声でしゃべらない。 ・作品に触れない。 3. ゲームの内容・方法とカードの使い方を解説する。 びじゅつかんでクレーの絵をかんじてみようよ 4. 5 点の作品について質問する。色や形、題名、表現内容等に関する質問を、各作品ごとに 3 つ準備する。質問を通じて、作品の見方を理解させる（児童の反応によっては、質問の内容を変更する）。 「南方の庭」を前にして Q1:（題名は伏せて質問）温かい感じ？寒い感じ？ Q2: 明るい感じ？暗い感じ？ Q3: どうして暗い色も使ってあるのかな？ 「バラの風」を前にして Q1: 風が吹いているのが解るかな？ Q2: 強い風かな？弱い風かな？ Q3: どうして赤い色が使ってあるのだろう？ 「家族の散歩、テンボ 2」を前にして Q1: どんな家族かな？ Q2: どうやって書いたのかな？ Q3: 楽しそうかな？ 「母と子」を前にして Q1: 優しいお母さんかな？怖いお母さんかな？ Q2: 何に書いてあるのかな？ Q3: この絵は好き？ 「町の前に立つ子どもたち」を前にして Q1: この絵の時間は、朝、昼、夕方、夜？ Q2: 子どもたちは何しているの？ Q3: こんな絵なら書ける人？ ・話す速さに気をつけ、子どもの答に共感しながら、質問を進める（表情豊かに質問する）。
課題の発展	5. 「気に入った 1 枚」を探しに行く。 （個別） ・「気に入った 1 枚」を見つけるために、時間が許す限り、じっくりと作品を鑑賞する。 ・鑑賞は静かに行う。 6. 「気に入った 1 枚」についての友達を発表を聞く。 （一斉）	5. 集合の時間・場所の確認をしてから、もう 1 度最初から作品を見て回らせ、自分が一番気に入った作品を選ばせる。 ・どうしてその作品を気に入ったのかが言えるように、そのよさをしっかりと心に刻んでおくように指示する。 6. 集合場所で、作品を選んだ理由について、2～3 名に説明させる（発表していない者には、朝の会等の場で発表させる）。

7. 評価

まずこの授業では、5点の作品に関する質問に対し、児童がどのような反応を示して答えるか、また、自分なりの観点で作品を見ているかどうかなどを観察し評価する。

次に、児童が一番気に入った作品をどのように心に受け止めているのかを、説明・発表によって知り評価する。その他に、教室での日常の鑑賞態度（さり気なく教室に図録を置いたり、壁面に複製図版を貼ったりして、鑑賞の環境を整える）、児童の日記類、保護者の意見等も参考にして、評価を深めるよう努める。

今度は違う展覧会にも行ってみたいという思いをもつ児童には注目する必要がある。

2. 図画工作科学習指導案（第6学年）： 小田村泰彦

図画工作科学習指導案

第6学年

指導者 小田村泰彦

1. 題材 「パウル・クレー 一矢印の秘密」

2. 指導の立場

1人の作家の作品を鑑賞する場合、一般にその表現を特徴づける要素はある程度絞られてくるものである。ところが、クレーが遺した作品の数は膨大で、その特徴は多種多様である。例えば記号。クレーは記号を画面の構成要素として用いる表現手法を試み、多数の実験的な絵画作品を遺している。また、色や線の表現方法が各作品で様々に異なっている。

そこで、本題材では、児童がクレーの作品の中に、その理解のキーになるとと思われる、記号のような簡潔で解りやすい表現や、色や線に関する少し高度な表現を、自分なりの観点で発見し、それらをテーマにもって鑑賞する態度を養うことをねらいとする。また、そういった活動の中で、クレーの気持ちや作品が描かれた背景等を読み取る力も養いたい。

6年生ともなると、美術館での鑑賞に馴れ親しんでいる者とそうでない者との差が開いてくるとと思われる。前者には、バラエティに富むクレーの絵が興味深く、見応え十分であっても、後者には、難解で退屈な表現に映るかも知れない。後者の場合、ただ何となく館内を徘徊するだけで、作品や作家に対してははっきりした印象をもたずに鑑賞活動を終える展開が考えられる。仮に印象をもったとしても、それは消極的性質のものであることが予想される。

そこで、指導にあたっては特に次の諸点に注意したい。

○テーマを設けて鑑賞することの面白さを実感させるため、まず事前授業において、クレーの絵に頻繁に登場する「矢印」を取り上げ、児童にその表現効果や意味について自問自答形式で考えさせる。

○ワークシートに、自分の選んだテーマ、その表現効果や意味、そのテーマが見られる作品、そのテーマに関するクレーの思い等について書かせることにより、作品や作家に対する思いを膨らませる。

○自分の選んだテーマをもとに、葉書に絵を書き、それを年賀状として友達に出したりすることで、鑑賞活動を創造的に発展させる。

3. 指導目標

(1) 各自に鑑賞のテーマを見つけさせ、鑑賞することの面白さを味わわせる。

(2) 作品やクレーに対して、自分なりの思いをもつことができるようになる。

4. 指導計画（総時間数：4時間）

第1次 矢印の秘密とは？（事前授業） : 1時間

第2次 新たな秘密を探せ！（展覧会鑑賞） : 2時間

第3次 秘密の受け渡し（事後授業） : 1時間

5. 準備物

教師：作品スライド（図録に掲載の作品図版を撮影）、スライド映写機、スクリーン、ワークシート

児童：筆記用具、葉書、色鉛筆

6. 学習の過程 (T=主要発問、て=てだて、提=提示資料)

過 程	学習活動・学習内容	教師のはたらき
意 欲 づ く (1 時 間)	<p>1. 4点の作品を見て、共通点があることに気づく。 ・矢印が描かれている ・暗い感じの色が使われている</p> <p>2. 各作品における矢印の表現効果や意味を考える。 <例:「バラの風」> ・風を表しているんだ ・実は作家の気持ちを表しているんじゃないか ・荒々しい感じがする</p>	<p>T1) 4点の作品を見て、不思議に思ったことはないか。 提) 作品スライド:「バラの風」「当惑する場所」「夕景の分析」「ぐらついたバランス」</p> <p>T2) 矢印の秘密を探ろう。 提) ワークシート て) 矢印の意味や、それが醸し出す表現効果について考えさせることにより、作品や作家に対する想いを膨らませる。 「バラの風」については自由討論させるが、他の3点については自分の想いをワークシートに書かせる(自問自答形式)。</p>
追 求 す る (2 時 間)	<p>3. クレーの生い立ちや活躍当時の時代背景を知り、作品を見つめ直す。</p> <p>1. 美術館内での基本的な鑑賞マナーを確認する。</p> <p>2. 一通り鑑賞した後、自分のテーマを決める。</p> <p>3. 新たなテーマに基づき、作品と対話する。</p>	<p>T3) 話を聞いて、納得した点はないか。 て) クレーの生い立ちや活躍当時の時代背景を簡単に説明し、自分の想いを確かなものにさせたり、新たな発見を促したりする。</p> <p>T1) 美術館では何かならないことは何か。 て) あらかじめワークシートに基本的な鑑賞マナーを書いておき、それを再度確認させる。</p> <p>T2) 新たな秘密を探そう。 て) 自分にとって一番印象に残った表現をテーマに選ばせる。また、なるべく友達と相談しないようさせ、秘密のテーマであることを強調する。</p> <p>T3) 秘密を解き明かそう。 て) 事前授業での学習活動を思い起こさせて、ワークシートに自分の想いを書き留めさせる。</p>
深 め る (1 時 間)	<p>1. 友達の見方や考え方を理解し、自分にはないよさを見つける。</p> <p>2. 自分の選んだテーマをもとに絵を描きながら、展覧会の感動の余韻を味わう。</p>	<p>T1) こっそり秘密を教えてよ。 て) 友達の発表を聞き、自分には予想もつかなかった見方や考え方があることを認識させ、それを自分の鑑賞活動にも試みて、そのよさを確認したいという気持ちにさせる(この気持ち、以後の鑑賞活動の意欲づけになるはず)。</p> <p>T2) 自分が見つけた秘密をもとに絵を描こう。 て) 自分の選んだテーマを基調とする絵を葉書に描かせることで、美術館で学習した内容を振り返らせる。そして、その葉書を年賀状等に使うことで、それを出す頃には忘れかけているであろう、美術館での展覧会を思い出させる。</p>

<p>パウル・クレー展で秘密を探せ!</p>		<p>6年 組 110. 名前 ()</p>
<p><矢印の秘密> 例:「バラの風」 問1:矢印は何を表しているのだろうか? 問2:矢印があることによって、どんな感じがする? 問3:矢印を描いたときのクレーの気持ちは? 今度は、自分で矢印についての問を考え、自分で答えてみよう! ○「当惑する場所」 問1: 問2: 問3: ○「夕景の分析」 問1: 問2: 問3: ○「ぐらついたバランス」 問1: 問2: 問3:</p>	<p>< の秘密> ～左のようなやり方で考えてみよう～ 「 」 「 」 「 」 「 」</p>	
<p>美術館内での注意 ・走るな! ・さわぐな!! ・作品に手をふれるな!!! ・他の人にめいわくをかけたないこと。</p>		

3. 美術科学習指導案 (第3学年): 伊藤和子

美術科学習指導案

第3学年
 指導者 伊藤和子

1. 題材 「クレー絵画展の鑑賞」

2. 題材設定の意図

(1) 教材観

義務教育における美術教育は、その最終段階である中学校第3学年で終了することになる。高等学校で芸術科・美術を選択する場合には、美術の学習をさらに進めることが可能になるが、卒業とともに美術から離れる者も少なくないはずである。それゆえ、多くの生徒にとって、本題材が展覧会を利用した最初で最後の鑑賞授業となるかも知れない。

そこで、今回の鑑賞授業を1つの契機として、たとえ卒業後に美術の授業を受ける機会がなくなっても、生徒各々が生涯にわたって美術を愛好する態度をもち続けることを願っている。そのために、本授業を印象深く感動的な授業としたい。

ここに取り上げたクレー展は、大規模な回顧展であり、クレーの各時期の代表作が多数出品されているので、鑑賞題材に大変適した展覧会だと言える。本題材は、その展覧会での作品鑑賞を核とするものである。

クレーは、理論的思考を基盤に創作活動を展開しようとした画家であり、その創作活動は、パウハウスやデュッセルドルフの美術アカデミーでの教育活動と密接に関連づけられていた。クレーの思考の中心には、生成・運動等、事象の力動的様態に関する問題意識があり、複雑に働き続ける自然対象に関心を寄せ、同時にまた、画家自身の内面の動きや状態にも意識的であり、そうした関心・問題意識から濃厚な意味を備える諸作品が表現された。あるものが生まれ、成長し、様々に変化していく過程、クレーはその動的過程の考察を通じて、創造上の靈感を得続けた。

また、クレーには動と静を対比的に捉える観点がある。静の状態が破られて、動が生まれ、その動は、やがて静に向かう、この省察は、生きることの深部に横たわる生と死の本質的問題にも適用できるものである。実際、クレーの作品を鑑賞するとき、そこに深く独自の人生観・死生観を認めることができる。

今回、クレー展を鑑賞することにより、これから各々の人生航路を進もうとしている中学校3年生に、絵画表現を通じて生きることを意味を模索・追求した、クレーという画家を知らせ、それを契機に、自分の人生を深く見つめさせたと思う。

ところで、生成・運動等を主要概念とする、クレーの作品を読み取るためには、画面がどのような要素で構成され、各要素がどんな意味・働きをもつのかを理解する必要がある。そこで、本授業では、点・線・面・形態・色彩等の、重要な造形諸要素に関する、クレーの優れた研究成果を参照しようと思う。そのことにより、生徒が一見難解な抽象的表現にも親しみを覚え、また、その美に感動して、表現内容がより深く理解できればと思う。

(2) 生徒観

心身両面で大きな変動を体験する思春期にあつて、生徒は将来に対して漠然たる不安を覚えながら日々を過ごしている。この時期、生徒は生きることに関する様々な問題に直面する中で、自分の人生をどう生きるべきかを真剣に考えるようになり、さらには死という重要な問題を洞察しはじめる。

そこで、クレーの作品を前にして、改めて生きる意味を問い、死の問題を考え、各自の人生をより豊かで有意義で中身濃いものとするための時を経験してほしいと考えている。

抽象的表現を理解することは難しいが、形や色の表現、動勢表現、空間の質の表現等の中に、誰もが感じうる共通的特質があることをまず知ってほしいと思う。著しく単純化された形態や矢印等の記号、また、点・線・面等の基本的造形要素には、作家の造形概念を伝達する視覚言語的働きがあることが理解できれば、クレーの作品の鑑賞はより深まると思える。

(3) 指導観

生徒1人1人がクレーへの思いを深めることが大事であるが、本授業では、個別的活動ではなく、班活動を軸に学習活動の展開を図らうと思う。

事前授業では、図録・画集・書籍類から下記の7点の作品を選び、各々について感想を述べ合うことで、作品鑑賞の観点を深めさせる。この学習活動が、美術館でのクレー展鑑賞の基盤となる。事後授業では、表現活動への展開を試みる。

「イタリアの町」「城の丘」「屋根の上の七時」「当惑する場所」「夕景の分析」「バルナッソスへ」「無題(死の天使)」「死と浄火」。

なお、時間的流れの表現、線・面のもつ性質を深く掘り下げた構成的表現、自分の思いを伝えようとしている表現、グラデーションのような色彩を重視した表現、死を主題とする表現等を、作品選定の観点とした。

3. 指導計画(総時間数: 4時間)

- 第1次 事前授業(展覧会鑑賞の導入):クレーとクレーの作品を知ろう 1時間
- 第2次 美術館にて作品鑑賞 2時間
- 第3次 事後授業: 鑑賞をもとに自分の表現を考えよう 1時間

5. 準備物

教師: クレーの作品が掲載されている図録・画集・書籍類、画用紙

生徒: 筆記用具、色鉛筆、水彩絵具セット

6. 指導過程

時間	主な学習活動と内容	指導上の留意点
1時間	<ul style="list-style-type: none"> ・学習班の形態で授業を受ける。 「イタリアの町」を鑑賞。 ・線と面の性格の違いを把握する(線: 攻撃的等。面: 静的等)。 「城の丘」「屋根の上の七時」の鑑賞。 ・不規則な直線が面を区切る場合の表現効果を理解する(空間の伸び縮み等)。 ・単調な面を複雑にする面白さを知る。 ・色彩に興味を覚える。 「当惑する場所」「夕景の分析」の鑑賞。 ・色のグラデーションの表現効果を考える。 ・明るい色の性格、暗い色の性格を考える。 ・矢印の意味を考える。 ・画面がいくつもの種類の運動性を備えていることを理解する。 「バルナッソスへ」の鑑賞。 ・美しい色彩表現を味わう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習班での鑑賞活動が活発に展開するように導く。 教師の発問: <ul style="list-style-type: none"> ・斜めの線・垂直な線が画面を分割しているが、各線の方向によって、視点の変化を感じないだろうか? ・視点が複雑に交じり合う感じはしないだろうか? 教師の発問: <ul style="list-style-type: none"> ・面の区切り方が不規則だが、そのことで画面にどういった感じを与えているか? ・面の表現が塊のように見えないだろうか? ・見えるとしたら、どうしてだろうか? 教師の発問: <ul style="list-style-type: none"> ・明るい色は広がる性格をもっていないだろうか? ・暗い色は安定し落ち着いた性格をもっていないだろうか? ・矢印の線的な要素には攻撃的性格があるだろうか? ・画面から何を感じるだろうか? 教師の発問: <ul style="list-style-type: none"> ・色を丁寧に何度も塗り重ねていないだろうか。

時 間	主な学習活動と内容	指導上の留意点
2時間 1時間	<p>「死と浄火」「無題(死の天使)」の鑑賞。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クレイが間近に迫る死をどう受け止めていたかを考えながら鑑賞する。 ・作品から受ける感じについて話し合う。 <p>1事前授業で学んだ観点をもとに、美術館で作品を主体的に鑑賞する。</p> <ul style="list-style-type: none"> *2基本的な鑑賞マナーを守る。 <p>1自分の顔をクレイ風に表現してみる。</p> <ul style="list-style-type: none"> *2クレイや作品について感想・意見を発表し合う。 	<p>教師の発問</p> <ul style="list-style-type: none"> ・題名は？ ・作品からどんな感じを受けるか？ <ul style="list-style-type: none"> *1作品が小さいので、画面をよく注意して見るように指導する。 *2美術館での基本的な鑑賞マナーを説明し厳守させる。 *1短時間で描くので、スケッチ的表現を試みるように指示する。 *2感想・意見を自由に積極的に発表し合えるような場とする。

IV総括と御礼

前年度は、静屋が、「アメリカの遺産—絵画の150年」展（1992年5月12日～6月21日、山口県立美術館）をもとに、勤務校である本学部附属山口小学校で、オリジナルな題材に基づく鑑賞授業を実施することができたが、今年度は、そのような展開が諸般の事情から無理であった。

だが、隅が試験的な鑑賞授業の実施を強く望み、その意義が十分認められたので、岡田が担当する「美術科教育法Ⅰ」で、受講生（3年生。全員、美術教育講座研究室所属）を対象に、本稿に掲載した題材に基づく模擬授業を行うことにした（7月8日。活動内容はⅡ-1 3.参照）。模擬授業は、岡本氏の活動実践に学んだ諸点を基礎に構想された意欲的なもので、また、隅のユーモラスで創意に満ちたパフォーマンスが、授業活動を魅力的なものにしていたので、児童を前にしての鑑賞授業が実現できなかったことが内心悔やまれた。

クレール展をもとにした鑑賞授業は、前年度と同じく、静屋が現場復帰した勤務校で、第6学年児童を対象に実施することができた。その折には、足立明男副館長にまた種々の便宜を図っていただき、加えて鑑賞授業に関する御指導を仰ぐことができ、その御厚意に深く感謝申し上げます。この鑑賞授業の実践については、岡田と静屋が第16回美術科教育学会で共同発表し、同学会の学会誌『美術教育学 第16号』に、授業実践報告を主とする論文を寄稿する予定である。

今回、演習で鑑賞教育研究を進めていく上で、岡本氏の美術館教育に関する論、ならびに、岡本氏が取り組んでいる鑑賞教育プログラムの実践は、メンバー全員にとって大変参考になった。岡本氏からは、様々な資料をいただき、また、活動実践に関する貴重なお話を伺うことができ、演習での活動を中身濃いものにする事ができた。

特に隅は、「ミュージアム・アドベンチャー」に親子で参加する機会を2度得て、その都度、岡本氏から詳細な説明をいただき、資料を頂戴するなど、大変御世話になった。その有意義な経験が、鑑賞教育に対する考え方を深める実質的動機になったことを心から喜び、紙面を借りて岡本氏の御厚意に謝辞を申し上げる次第である。メンバー一同、岡本氏の一層の御活躍・御発展を祈るとともに、岡本氏の誠意溢れる御応対に深く感謝申し上げます。

また、斎藤氏には、美術講座とギャラリー・トークを通じて、クレールとクレールの作品に関する専門的観点からの興味深いお話を伺うことができ、題材開発に関する諸種のヒントが得られた。ギャラリー・トーク後にも、岡田等の質問に親切に答えてくださり、斎藤氏の御厚意に深く感謝申し上げます。

なお、展覧会場でお会いした實松宣夫氏より、ルドルフ・シュタイナーの教育観・芸術観等と関連づけた、示唆に富む独自のクレール論を詳しく伺うことができ、これも有意義であった。實松氏に厚く御礼申し上げます。

演習では、今年度の活動成果を基盤に、次年度も「鑑賞教育プロジェクト」の継続的発展を図っていきたいと考えている。